

『うつほ物語』 仲忠の因縁

— 変化する琴の音 —

猪 川 優 子

はじめに——継承者としての仲忠

仲忠は、波斯国で秘琴とその秘曲を授かった俊蔭を祖父、その子俊蔭女を母とする、琴の一族第三番目の継承者である。生まれた時の仲忠は「玉光り輝く男」であり、嫗の夢占いによつて「孝の子」と言される。その後、すくすくと伸びるがごとく急成長した仲忠は、容姿端麗にして聡明、親を「愛しきもの」と思いやる、まさに、俊蔭が娘に遺言した「もしは、子あらば、その子十歳のうちに、見給はむに、聴くかしこく、魂調ほり、容面・心、人にすぐれたらば、それに預け給へ(俊蔭 二三頁¹)」ということばにぴったり適う子どもであつた。そして六歳の時、北山のうつほにおいて、俊蔭女から琴の手ほどきを受ける。その時の手は俊蔭女をしのぎ、継承者としての資質を理想的に備えた人物として、その後の一族を背負つて立つことが予感されたのであつた。

しかし、北山のうつほで類い希なる資質の片鱗を見せ、京に下り

て宮中で朱雀帝から俊蔭の手をしのぐと絶賛された仲忠ではあつたが、時に奏でる琴の音が、手放して称賛される類のものばかりではないという事実が、その後の展開に見受けられるのである。それは、自身が感じる場合もあれば、聴く者が感じる場合もある。そこで、仲忠の琴の音が誰にどんな影響を及ぼしているのかについて着目し、何に起因した音色であるのかという、音の奥に秘められた意味を探りたい。本稿においては、特に妻である女一宮に焦点を当て、二人の仲と琴の音との関係を辿りつつ、検討していく。

一 女一宮を苦しめる琴の音

仲忠は、神泉苑の紅葉賀において、嵯峨院の要請により朱雀帝らの御前で秘琴「南風」を演奏する。

仲忠、かの七人の一つてふ山の師の手、涼は、弥行が琴を、少しねたう仕うまつるに、雲の上より響き、地の下より響み、風・雲動きて、月・星騒ぐ。礫のやうなる水降り、雷鳴り閃く。雪、衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。涼、弥行が大曲の音の出づる限り仕うまつる。□天人、下りて舞ふ。仲忠、琴に合はせて弾く。朝ぼらけほのかに見れば飽かぬかな中なる乙女しばしとめなむ

歸りて、今一返り舞ひて、上りぬ。 [吹上・下 二九二頁]

天人降臨という奇瑞を起こした仲忠の演奏は帝の感動を呼び、官位

昇進と、朱雀帝女一宮降嫁の宣旨を賜る。仲忠は、宣旨に従つて女一宮と結婚するが、帝を始め人々を感動させたはずの仲忠の琴の音が、今度は女一宮を苦しめることになる。次は、女一宮がいぬ宮を出産した時に、仲忠と俊蔭女が弾琴する場面である。

はうしやうといふ手を、はなやかに弾く。声、いとほこりに、にぎははしきものから、また、あはれにすこし。よろづ物の音多く、琴の調べ合はせたる声、向かひて聞くよりも、遠くて響きたり。《略》

中納言、かかるべき曲を、音高く弾くに、風、いと声荒く吹く。空の気色騒がしげなれば、「例の、物、手触れにくきぞかし。わづらはし」と思ひて、弾きやみて、尚侍のおとどに申し給ふ、「今、こかく一つ仕うまつらむとすれど、騒がしければ、えなむ。これに、御手一つ遊ばして、鬼迷がさせ給へ」と聞こえ給へば、「はしたなげにぞあめる」。君、「仲忠がためには、これにまさる折なむ侍るまじき」と聞こえ給へば、尚侍のおとど、御床より下り給ひて、琴を取り給ひて、曲一つ弾き給ふ。その音、さらに言ふ限りなし。中納言の御手は、面白く、凝しきまで、雲風の気色、色殊なるを、この御手は、病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば、皆忘れて、面白く、頼もしく、齡榮ゆる心地す。

〔葦開・上 四七五頁〕

仲忠は、自らの弾琴によつて空の様子が荒れてきたことを感じ、俊蔭女に交代を頼む。後に女一宮は、弾琴の様子をこう語る。

「親のは、いと悲しう、聞きしかば、ただ泣きにぞ泣かれし。それ聞きしままに、苦しきこともなくて起き居にき。この人の、いと荒々しく恐ろしくおぼえて、胸なむ走りし」

〔国譲・上 六六〇頁〕

女一宮は、空を騒がす仲忠の琴の音を、趣として感じるのではなく苦痛として受け止める。俊蔭女の琴の音に、産後の痛みを和らげる効果を得たのと明らかに差がある。この差は、そのまま仲忠と女一宮との関係につながると考えられる。そこで、続いて二人の関係を辿り、仲忠の音の何が女一宮に苦痛を与えたのかを考える。

二 女一宮との心のずれ

仲忠は宣旨によつて女一宮を妻にするが、あて宮一人を思い続けた仲忠にとつて、この結婚は本意なものであった。しかし仲忠は、女一宮以外に妻を持たず、二人の子どもを得、形としては申し分のない家庭であるといえる。笹淵友一氏は、仲忠夫婦が「穏やかな家庭生活を営ん」でおり、仲忠が「典型的夫婦愛の実行者」であると述べておられる。ただし「仲忠の夫婦愛は恋愛感情とは自ら別種の理知的要素を多分に含んだもの」であり、作者はその矛盾から生まれた相克を示している」とまとめておられる。本稿では笹淵氏の驥尾に付して、さらに女一宮との関わりを重点的にみていく。

仲忠と女一宮夫婦は、心通わせる暖かい場面がほとんど描かれな。女一宮は、仲忠に対して徹底的に冷淡な態度を取り続け、それ

は結婚当日からすでに始まつてゐる。

藤中納言、靱負の君を御使にて、「ただ今なむまかでつる。喜
びなども聞こえてしがな。渡り給ひぬべしや」など聞こえ給へ
り。宮、「喜びは、ここにもうれしくなむ。ただ今悩ましくて」

など聞こえ給へり。中納言、「常に、かくのみのたまはせむす
らむな」とて、

「沖つ白波 四五頁」

婚儀を終え、迎えに来た仲忠を、女一宮は体調が悪いと言つて拒絶
する。その時仲忠が口にするこゝばは、傍線部にみられるように將
来を愁う嘆きであり、その後の二人の關係を予測しているかのよう
である。事実、女一宮は仲忠に最後まで心を許さないのであるが。

女一宮は、仲忠の働きかけをことごとく拒絶する。仲忠は、女一
宮の冷淡さを嘆く一方、献身的な態度を貫く。女一宮を氣遣う仲忠
という構図が端的に示されているのが、女一宮出産場面である。長
女いぬ宮誕生の時には、起きあがろうとするのを制し、臥したまま
で食べ物をとるよう促す。長男宮の君誕生の時は、難産で命の危険
がささやかれている時に、次のように取り乱す。

大将殿、衣は脱ぎもあへ給はず、直衣などの上に水を浴みつつ
惑ひ給へば、人々脱ぎ替へさせつつ、庭に出でて、大願を立て
て申し給ふ、「この人、え免れ給ふまじくは、おのれを殺し給
へ。片時遅らし給ふな」と、臥しまろび泣く。

「国譲・下 八一〇頁」

仲忠は、自分の命を差し出すといつて号泣する。その姿に周りは驚

き、特に正頼は、「かかりける御仲を、初めは心行かず思ほして、
勘当せられしはや」と、結婚当初との態度の違いに驚く。仲忠はそ
のまま御帳に入つて女一宮を抱き起こし、「仲忠が心さし」と御湯と
御膳を口へと運ぶ。女一宮は一口飲み、一口食べる。ただ、決して
胸の内は語られない。ひたすら仲忠の献身の様が描かれるだけであ
り、しかもその後の二人の距離が縮まつたわけでもない。

しかし、拒絶し続ける女一宮に対して、仲忠はただ一途に女一宮
を思つて尽くしていただけともいえない。冷淡な態度を嘆く中で、
時に女一宮を非難する。

父君に、尿ふさにしかけつ。宮に、「これ抱き給へ」とてさし奉
り給へば、「あなむつかし」とて押し出でて、うち後方向き給ひ
ぬ。君「頼もしげなの人の親や」。典侍にさし取らせて、拭は
せ給ふ。宮、「いかに、香臭からむ。あなむつかしや」とてむつ
かり給ふ。 「蔵開・上 五〇八頁」

仲忠は、いぬ宮の世話をしない女一宮を、親として頼りないと嘆く。
女一宮の親としての未熟さが、仲忠とのやりとりの中で描かれ、仲
忠によつて強調されていることに注目したい。また、仲忠は長男宮
の君を次のように評する。

「さらに、いと見苦しう、ただ、宮の御真似をして、さがなう
心強く、なまめかしき氣も侍らず」 「楼の上・上 八四六頁」

仲忠は、宮の君が女一宮の真似をして意地が悪く強情であると言う。
そのこと故に仲忠は息子の宮の君を疎ましく思うのであるが、この

発言は、そのまま仲忠の女一宮への評価であるともとれるのである。

女一宮がいぬ宮出産の際に感じた仲忠の琴の音に対する苦痛は、そのまま二人の不協和音を示しているようである。しかし、仲忠は女一宮に対して献身的に尽くしており、原因は女一宮にあるかのようには思われる。しかし、女一宮がここまで態度を硬化させるには、単に女一宮の性質だけに原因があるとは考えがたい。そこで、仲忠が結婚を渋った頃にさかのぼって、更に原因を追及する。

三 持続されるあて宮思慕

あて宮求婚譚において、あて宮と唯一心を通わせた仲忠は、女一宮と結婚してからも思慕し続ける。そして女一宮は、仲忠のあて宮思慕をしばしば指摘することになる。

宮、「それは、わが人にもあらねば、御子の数にも思さで、ただに捨つ」とこそは思しけれ。昔は、鬼にもこそは賜ひけれ。ただ人なれど、この君は、親の、さばかり思ひかしづき給ひしを、天下に思ふとも、何わざかせまし」「蔵開・上 五一〇頁」

女一宮は、帝が仲忠と結婚させたのは自分への愛情がなかったためと嘆き、どんなにあて宮を思おうとどうにもならないことだと言つ对する仲忠は、女一宮への愛情の深さを語るのであるが、女一宮はあて宮と共に育ってきたため、あて宮求婚譚の時における仲忠のあて宮に対する思いが深いことを肌で感じていたのだろう。次の場面に注目したい。これは、いぬ宮五十日において、かつてのあて宮求

婚譚をめぐって大宮と弾正の宮、仁寿殿女御が語らう場面である。

大宮、「さらに承らざりし。かの人をば、兵部卿の宮に、さのたまひき。さては、あるまじきことなれど、『三条の大將、さのたまふ』と聞く。源宰相をこそ、心ざしあるやうに聞き侍りしか。さらにこそ知らざりけれ。御いらへ、「多くも聞こし召し残したりけるかな。いといみじきことども、多く侍りしものを。まづは、かしこそ」とて、中納言を見やり給ひて、「ここにこそ、同じ所にて、よくは知り給へらめ。しかの誓ひなることもや、思し合はすることも侍らむかし」とのたまへば、宮、「をかし」と思す。中納言、「苦し」と思す。」「蔵開・上 五二一頁」

この場には、仲忠と女一宮も居合わせている。大宮があて宮の懸想人に仲忠を挙げずにいると、弾正の宮が、一番熱心な懸想人は仲忠であったと指摘する。そして、あて宮と一緒に住んでいた女一宮に確認するのである。この時女一宮は、仲忠が「苦し」と思うのに対して「をかし」と思う。女一宮は、あて宮に対する仲忠の思いの強さとあて宮春宮人内によつて報われなかつた仲忠の失意を、近くにいたからこそ身にしみて感じていたといえる。そこで、あて宮への思いが報われずに自分と結婚し、結婚後も思慕を続ける仲忠が凶星をつかれて窮地に陥るのを、「をかし」と感じたのだろう。

この後、仲忠は女一宮と語らい、自分の心には恋愛対象としてのあて宮はもう存しておらず、女一宮を思っていると訴える。しかし同時に、あて宮を垣間見させるよう懇願している。仲忠は以前にも

あて宮垣間見を頼んでおり、女一宮が叶えないことを恨みがましく言う。仲忠は、あて宮垣間の口実として、いぬ宮との比較を挙げるが、心に残るあて宮思慕が垣間見への執着につながっていると考えられる。あて宮への断ち切れない思いは、女一宮に届いたあて宮からの手紙を取り上げて読み、「あはれに、昔思ひ出でられて悲しければ、ゆゆしくて置きつ」と心乱す場面からも窺え、押さえても押さえきれない思いが時として表れ、女一宮に伝わるといえる。

女一宮は、仲忠のあて宮への消えない思いを、仲忠にあてた手紙の中で歌に詠む。

消えずのみ見ゆる思ひもあるものを何か袂の凍りしもせむ

〔葦開・中 五三九頁〕

限りなくありし昔の見えしかば今も我にはあらじとぞ思ふ
ととぞ。聞こえにくきや。からうして、物思ひ知られたりける
かな。

〔同 五四六頁〕

傍線部に注目したい。女一宮は「私もようやくあなたの物思いの心
がわかるようになりましたよ」と書き付ける。仲忠のあて宮思慕は
消えないことに気付いたというのである。女一宮は、かつてあて宮
と共に暮らし、今は仲忠と共に暮らしている。仲忠の気持ちを理解
しているが故に、仲忠を拒絶し続けるとも考えられるのである。

ここで、仲忠と女一宮夫婦の、世間での評判をおさえる。次は、
女御・更衣の局の前を通り過ぎる仲忠を見た人々の反応である。

「なほ、女一宮こそ、いと心憎けれ。そこと、心、人に知ら

せざりつれども、物言ひ触れぬなかりしものを、傍目もせさせ
で持給へるよ」

〔葦開・上 五二六頁〕

人々は、色好みであった仲忠を、女一宮は他の女性に目も向けさせ
ないと噂する。女一宮が仲忠の一人妻であるため、夫婦仲は円満で
あると映るのである。また、物語最終局面のいぬ宮秘曲伝授へと話
題が向かう場面において、女一宮の車を見て、人々が「宮、何を思
ひ給ふらむ。ただ人にはさらにも言はず、宮たちと聞こゆるも、さ
らに、いとかばかりおはするなければ、『めでたし』と見給ふらむ
かし」と、羨望するくだりがある。仲忠は女一宮に献身的に尽くし
ており、夫婦の心のずれは、外にはあらわれない。人々の目は
専ら一夫多妻の世にあつて一人の妻を守っているという事実に注が
れており、そこから導かれる仲忠の誠実さを評価しているのである。
また、仲忠と女一宮との夫婦仲が、俊蔭女のほとんど関知しない
ところであるという事実にも注意したい。俊蔭女は、京極楼でのい
ぬ宮秘曲伝授の間、通つてくる兼雅を拒む理由に、仲忠が女一宮と
会っていないことを挙げる。実際は、女一宮が一方的に仲忠を拒絶
しているのであるが、俊蔭女の目には、仲忠が女一宮に会うのを我
慢していると映るのである。俊蔭女にも、仲忠と女一宮は円満な夫
婦として認識されているのである。

しかし、いくら世間で円満であると思われようと、女一宮の拒絶
は拒絶として続く。女一宮は、仲忠の献身を冷静に見つめている。
次に挙げる、仲忠と女一宮との歌の遣り取りに注意したい。

御領袋なるは、調じて、宮（女官）に参り給ふとて、聞こえ給ふ、

君がため小鷹手に据ゑ徐まつむしり食ふ鳥を取りつつ

宮、

鷹（女官）ゑて野辺にと言ふはわがためにかりの心をしらするは

せば
〔国譲・下 七七八頁〕

女一宮は、仲忠の行為は「かり（仮）の心」からくるものであり、本心からの誠実さではないと感じている。この歌に、仲忠を拒絶する心が集約されているといえるのではないか。女一宮は、仲忠の口のおまさを日頃から感じており、それは次の場面からも窺える。

「いとまがまがしきことのためはす。かくのためはせば、さらに、二、三年も渡し奉らじ。いと心憂く、戯れにくく。かかることは仰せらるべしやは」とて怨じ聞こえ給へば、「これこそ、まがまがしかめれ。琴弾く人は、思ふ人見ず、離れてや留ふ。静かなる所は、さもありなむ。『一年ばかりは』とあれば、いとあさましく。幼ければ、何心なく、」らじとも知らず、

「離れてあらむ』とものしけるにこそあんなれ。しばし、人々のものせらるる時、あなたにあるをだに、心もとながり纏はずものを、『わびし』ともこそ思へ。いかなるべきことにかあらむ」と、いと心苦しげにのたまへば、
「楼の上・上 八六七頁」
女一宮は、一年間もの間いぬ宮と別々に暮らすことに對する苦しさ
を仲忠に訴える。その中で、「いぬ宮はまだ幼いでしょうから、何も考えないままに『いつまで』ということも知らずに『母と離れて

もいい』と言ったのでしよう」と、仲忠がいぬ宮の幼さにつけ込んだことを指摘する。事実その通りであり、仲忠も重々承知しているのであるが、加えて仲忠は女一宮にも心理作戦で追い込んでいく。

そのやり方とは、自分を非難する女一宮に、もういぬ宮には琴の秘曲など教えないと突き放し、ひるませるといふものである。女一宮にとつてもいぬ宮への秘曲伝授は気がかりであることを仲忠は知っており、そこを突くのである。仲忠は、女一宮の心が動いたことを感じると、「今ぞ、思ふやうなる心地し給ふ思い通りになつた」と喜ぶ。ここにみられるのは、仲忠の人の心を動かす巧みさである。

女一宮は、いぬ宮に「大将をば、聞くとぞ聞くのみに」と、仲忠の言うことを聞き流すよう諭す。女一宮は、仲忠の誠実さの裏に隠された巧妙さを敏感に察しているといえる。

そこで続いて、女一宮が感じる仲忠の内なる心について、女一宮以外の女性との関係から探っていく。

四 仲忠の内なる色好み

仲忠は、兼雅や俊蔭女の前では好き心のない男として振る舞っている。次のように兼雅は、自らの好き心を仲忠と比較する。

「この御後ろ手の広がり懸かるに見つきてこそは、我は聖になりたれ。よき人を家に多く据ゑ、仕う人のよきを集めて、宮をば盗みもて来て、さる者にて据ゑ奉りて、人の妻などのもとにも、至らぬ限なく歩いて、皆憎まれでこそありしか。今様の

人は、あやしうまめにこそあれ。まづは、かしこき天下の帝の御娘を持たりとも、その妹の皇女たち、そのあたりの人の妻は、女御まで残してましや。罪の浅きにやあらむ」とのたまへば、

大将、^{大將}「いとうたてであること。一人侍りし時、『いかで』と思

ひ給へし人をだに、よき折侍りしかど、さもあらずなりにしものを」。おとど、^{おとど}「それこそ、いとわがごとくなけれ。今も、な

どか、させざらむ。まかでてものせられむ時、空酔ひをして、ただ入りに入るべきぞかし。人も騒がば、『いたく酔ひにけりや。ここは、いづくぞ。中のおとどにはあらずや』と、ただ酔

ひに酔ふばかりぞかし」。北の方、^{北の方}「いと悪しきこと、多くし給ひけるかな。若き人は、親、かくのたまふとも。そこは、早う

立ち給ひね。な聞き給ひそ」。おとど、^{おとど}「男は、身を顧み、人の思はむことを知りなば、よき妻は得てむや。《略》」

〔葦開・中 五六九頁〕

兼雅は、色好みである自分を語るることによつて、仲忠をたきつけようとするが、仲忠はその手に乗らず、俊蔭女も兼雅をたしなめる。

また、いぬ宮の世話に来ていた典侍にも、自らの好き心を否定する。

典侍、「否や。まことは、いとぞいみじきや。ただ今の人は、

三条殿の北の方ぞ一、藤壺ぞ二、宮三にこそおはすめれ。男は御前。^{御前}中納言、^{中納言}「まばゆくものたまふかな。さだにあらば、心

地好きぬべけれとのたまへば、典侍、「さては思はずかし。

傍らほとりも」などて、

〔葦開・上 五〇九頁〕

仲忠は、典侍が仲忠を当代で第一の男性であると称賛することばを、好き心のなさを理由に否定する。しかし、典侍の視線は仲忠の男ぶりの良さに注がれており、意識の中に、仲忠が色好みとして充分素質があると承知していることを窺わせる。

また女三宮によつて、女一宮を妻にしてから好き心がなくなつたと語られており、ここから結婚前は兼雅に負けず劣らず色好みであつたことが知られる。実際、仲忠が藤壺付きの孫王の君とさま宮付きの孫王の君に通つていたことが後に明らかにされておられ、侍従のめにも「忍び相手」として通つていたことが後に語られている。

その他、三春高基にも「好き者」と評されており、朱雀帝も、仁寿殿女御との語らいの中で、仲忠を評して「仲忠は、天下にめづらしき心あらむ女も、あれだに少し気色あらば、え忍ぶまじき人ぞかし」と、女性を惹きつける性質があることを指摘している。結婚前の仲忠は、色好みとして名を馳せていたのである。

では、女一宮との結婚後はどうであろうか。仲忠は、女一宮以外に妻を持たない。兼雅が、承香殿女御の娘である斎宮をどうかと勧めた際も、仲忠は話を断る。しかし、女性に対する興味を全く失つたわけではないことが、次の場面から窺える。

かくて、暁になり、御格子も下ろさず、二の宮の御方とこなたとは、高き御屏風立てたり。おはする所近くては、御几帳立てたり。^{大將}「この折、宮たち見奉らでは、いかでか」と思ひて、^女一の宮いとよく大殿籠りたるに、脇息を踏み立てて、御屏

風の上より覗けば、「明けぬ」と思して、男宮たちは、皆大殿籠りたり。二の宮は、御几帳の帷子は、御達うち懸けてまだ下ろさず、起き給ひて、「いささかなる」とせむ」と思して入り給ひつるを、いとよく見奉り給ふ。白き綾一襲奉りて、御髪なども大殿籠りふくだめたれど、「いと気近く、うつくしげなり」と見る。姫宮も起き上がり給へるを、これは、まだ小さく、片成りにて、貴なり。「よくも生み集め給へる皇女たちかな」と見て、居給ひぬ。〔国譲・中 七二五頁〕

仲忠は、女一宮が眠っている隙を狙つて、屏風の上から女二宮と女四宮を覗き見する。この場面に至るまで、仁寿殿女御が何度も仲忠に対して警戒の目を向けるのであるが、心配は、まさしく的中するのである。ただ、仲忠の覗き見は誰にも知られることはなく、近澄や祐澄が女二宮を奪おうとしてやつて来ると、仲忠は何事もなかつたように女二宮を護る立場にまわる。仲忠が周囲に見せる姿は、女二宮に興味を示して覗き見をする色好みの姿ではなく、女二宮目当てに群がる色好みたちを追い払う姿なのである。あくまでも仲忠は、表向き色好みたちとは一線を画す立場に身を置いている。しかし、好き心を全く消し去つたわけではなく、内に秘めているといえる。

五 淫欲の罪

仲忠は、表面的には当代随一の貴公子として、その容姿の卓越や学才の豊かさとともに人格についても高い評価を得ている。しかし

一方で、必ずしもすべてにおいて誠実であるとは言い切れない部分があることが窺える。この性質は何に起因しているのだろうか。ここでは、仲忠が誕生するに至つた経緯を振り返り、俊蔭の代までさかのぼつて、仲忠の抱える因縁について考える。

仲忠の祖父俊蔭は、波斯国に漂着し、辛苦の旅の末、琴の家の始祖となるべく天人に「天の掟」を語られる。そして、俊蔭と天人の七人の子が七日七夜阿弥陀三昧に合わせて秘琴を弹奏する時、仏が降臨し俊蔭たちに因縁を語る。この時仏は、俊蔭に「前の世に淫欲の罪はかりなし」と告げる。仏は続いて、未来永劫に渡つて因縁を忘れず仏道に従うよう俊蔭に言い置く。この仏のことばが俊蔭の孫である仲忠にも及んでいるのではないかと考えるのである。また、仲忠は天人の七番目の子の生まれ変わりであると預言される人物である。天人の七人の子は、「我は、昔、兜率天の内院の衆生なり。いささかなる犯しありて、切利天の天女を母として、この世界に生まれて、七人の輩、同じ所に住まず（俊蔭 十七頁）」と告白しているように、彼らもまた罪を背負つた身であることが語られている。

俊蔭および天人の子の罪は、弾琴の力によつて償われた。『うつほ物語』における琴に内包される仏教思想は、河野多麻氏⁵⁾が「宗教的神秘性」として認めておられるように明らかである。仏教思想を根底に始発した琴の一族の物語が、琴とともに仏教思想をも継承し、仲忠に至ると考える。俊蔭は、前世におけるの淫欲の罪を思い、一世の源氏を一人妻として生涯愛情を注いでいる。では、仲忠はどう

であろうか。確かに形の上では女一宮一人を妻としており、その点俊蔭と通じるが、俊蔭が妻に愛情を注いだのに対して、仲忠は女一宮を妻としながらも春宮妃であるあて宮すなわち他人の妻を思い統けている。また、兼雅の妻の一人である宰相上に思いを寄せせる。この時仲忠は自分でも自己のよこしまな懸想心を自覚している。このような心は、仏教で戒められている執着、しかも欲の一つである淫欲につながるものではあるまいか。淫欲は三毒の一つである貪愛の代表的なものである。『法華経』において「深く五欲に著すること、犍牛の尾を愛するが如し。貪愛をもつて自らを蔽ひ、盲瞶にして見る所なく、大勢ある仏と、及び苦を断ずる法とを求めず、深く諸の邪見に入りて、苦をもつて苦を捨てんと欲す。(方便品)」と、貪愛は戒められており、貪愛が苦しみを招くとされている。仲忠は、あて宮への思いに苦しむ。同じくあて宮の求婚者の一人であった兼雅が、俊蔭女へと愛情を戻し、俊蔭女との愛を育むのと対照的である。私が俊蔭に戒めた淫欲の禁は、仲忠にも受け継がれた因縁であり、琴の一族としての因縁と切り離せないものだと考えるのである。

仲忠はかつて、うつほに尋ねてきた兼雅に次のように語っている。
子（有志）のいらへ、「何か。世は、憂きものにこそ侍りけれ。人の身を受けながら、いかに契り置きて、かくうとましき獣の中に、それを友とし、かれらに養はれて、『今日や、今日や』と、身を施しつべく、魂の休まる時なくて、恐ろしく悲しき目を見侍らむ。前の世の罪思ひやられ侍れば、天地の許されなき身に

侍るめり。『いよいよ深く、むつかしき頭下ろし捨ててまかり籠らむ』となむ思ひ給ふる」
〔俊蔭 四七頁〕

仲忠は、うつほでの困窮した暮らしを前世の罪と考え、仏道に帰依する思いを語る。仲忠のこの姿は、波斯国から戻った俊蔭が両親の死を知つて自らの不孝の罪の深さを思う姿と重なる。子ども時代の仲忠は天も味方する孝の子であり、琴の手も俊蔭女をしのぐ。しかし、うつほを出て京に入り、孝の心こそ失わないものの少しずつ世俗に染まつていき、女一宮との心のずれやあて宮への叶わぬ思いを抱える人間になっていく。そこに在るのは、身を慎んだ俊蔭とも、信仰心篤いかつての自分とも異なる姿である。仲忠の琴の音が変化したのは、前世の罪を思う気持ちや自らの心の内から失った代償であると考えるのである。かぐや姫が贖罪の場を人間界に求められたように、人間界は迷いや罪の多い世界である。天人であるかぐや姫でさえも人間界での生活の中で「物思ひ」の心を知る。仲忠も、煩惱のあふれる世俗で自らの背負う因縁への意識から遠ざかり、女一宮との心のずれが、女一宮に苦痛を与える琴の音となり、自らの苦しみ荒々しい琴の音に変化したのだと考えられるのである。

おわりに——継承者としてのいぬ宮

仲忠は、秘琴とその秘曲の継承者として俊蔭女から手ほどきを受ける。その手は母をしのぎ、一族の将来を担うのに申し分のない子どもとして仲忠の物語は始発した。しかしながら、うつほから京に

出た仲忠は、物思いに苦しみ、音色も純粹さに欠けるようになる。

そこで注意されるのが、琴の音に荒々しさが含まれたのが、いぬ宮誕生の場面であるということである。いぬ宮は、仲忠に続く継承者として、京極楼で秘曲を伝授されるのであるが、その手は俊蔭女や仲忠をしのぐものとして物語に描かれる。仲忠が、いぬ宮誕生の場面において、自ら弾き止めるということは、この時すでに仲忠からいぬ宮へ継承者の交代が行われたといえる。仲忠は、いぬ宮に秘曲を伝授する際、自分の手が母に劣ることを自覚する。また、一年間にわたるいぬ宮への伝授期間中、七夕の供物として三人で彈琴する際も、仲忠は横笛の名手としての姿をみせる。そして、京極邸における彈琴披露の場では、俊蔭女といぬ宮のみ彈琴するのであって、仲忠は加わることはない。

仲忠は、いぬ宮誕生の場において、自らの琴の音の変化を自覚し、弾き止めることによって、継承者としての位置を離れ、いぬ宮に譲る決意をしたのだといえる。

〔注〕

(1) 『うつほ物語』本文の引用および頁数については、『うつほ物語 全』（室城秀之校注 平7 おうふう）により、私に傍線や注記を付した。

(2) 仲忠の人物造型に関しては、はやくに笹淵友一氏が容姿・性格・才能という三視点から分析され、儒教的道德觀を背景とし

た道義觀、理知と感情の併存した性格、功利的な現実主義、音楽的才能という四側面の内面を持つと論じておられ（仲忠の人物描写にあらはれたる宇津保物語作者の思想」（『国語・国文』

第六巻第四号 昭11・4）、さらに斎藤正志氏が、仲忠の要素は相互に関連しあつており、「琴の一族」という（族）、「學問の家」という（家）、清原氏と藤原氏という（氏）の三つの基本要素に抽象化されると論じておられる（藤原仲忠の人物造型——（秘琴）（漢学）（官職・御帯）——（『二松』3 平元・3））。ただ、従来の仲忠論は、物語の主人公的存在としての重要性や、特徴的に備わる「孝」という美質から、肯定的な側面が主として注目されている。本稿では、従来の仲忠論を首肯しながらも、より多面的なとらえ方を目指す意味で仲忠の人物造型に一石を投じたいと考える。

(3) 前掲注(2)の笹淵論文。

(4) あて宮は春宮入内後、飛香舎に居住し、「藤壺」と称されるが、便宜上「あて宮」呼称に統一する。

(5) 河野多麻氏「うつほ物語の琴」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』第八巻 昭31・3)。

(6) 野口元大氏は「靈異と榮誉——『楼の上』の主題——」（『講座平安文学論究』第十二輯 平安文学論究会 平9 風間書房）において、「まめ心とすき心との間に動揺する仲忠像」を指摘、仲忠のあて宮思慕の持続を「仲忠の中間的性格の現れ」であると

しておられる。

(7) 野口元大氏は『うつほ物語の研究』V「うつほ物語の音楽」(昭51 笠間書院)において、琴の音と自らの心との関係について、「琴の秘儀」は「道化の秘密と冥合する根源的な心的体験の会得」であると述べておられる。

(8) 目加田さくを氏は『物語作家圏の研究』(昭39 武蔵野書院)第七章第二節において、『うつほ物語』における琴について詳細に検討しておられ、特に、琴が「君子左琴」「右書左琴」として重要であると述べておられる。仲忠が琴から離れていくことについては言及しておられないが、本稿では、仲忠が因縁に対する意識から遠ざかることが、目加田氏のいう「君子」としての存在から遠ざかることにつながると考え、結果琴からも遠ざかるを得なかつたと考える。

——いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程後期在学——